

岩倉使節団人物列伝・欧米回覧中に逢った外国人編。外国人36名



岩倉使節団人物列伝外国人編・36名 一覧リスト (次ページへ)

(名前読み、実名、生没年、使節団が逢った時の役職の順)

- | | | | |
|----|----------------------------------|-----------|------------------|
| 1 | ・グラント (Ulysses Simpson Grant) | 1822-1885 | アメリカ大統領 |
| 2 | ・フィッシュ (Hamilton Fish) | 1808-1893 | アメリカ国務長官 |
| 3 | ・デロング (Charles E. DeLong) | 1832-1876 | 駐日米国特命全権公使 |
| 4 | ・ブルックス (Charles Wolcott Brooks) | 1833-1885 | 在サンフランシスコ領事 |
| 5 | ・ロールストン (William C. Ralston) | 1826-1875 | カルフォルニア銀行創設者 |
| 6 | ・ランマン (Charles Lanman) | 1819-1895 | 駐米日本公使館書記官 |
| 7 | ・クック (Jay Cooke) | 1821-1905 | National Bank 頭取 |
| 8 | ・パーソン (William Edwin Parson) | 1845-1905 | 牧師 |
| 9 | ・ブランド (Max A. S. von Brandt) | 1835-1920 | 駐日ドイツ公使 |
| 10 | ・ヴィクトリア女王 (A. Victoria) | 1819-1901 | イギリス女王 |
| 11 | ・グランヴィル (George L. G. Granville) | 1815-1891 | イギリス外務大臣 |
| 12 | ・パークス (Harry Smith Parkes) | 1828-1885 | 駐日イギリス全権公使 |
| 13 | ・アームストロング (W.G. Armstrong) | 1810-1900 | 発明家・実業家 |
| 14 | ・ブラントン (Richard Henry Brunton) | 1841-1901 | 技術者・灯台築造方首長 |
| 15 | ・ティエール (Louis Adolphe Thiers) | 1797-1877 | フランス大統領 |
| 16 | ・シャノワヌ (Charles J. Chanoine) | 1835-1915 | フランス陸軍軍人 |
| 17 | ・レオポルド二世 (Leopold II) | 1835-1909 | ベルギー王 |
| 18 | ・ヴィレム三世 (Willem III) | 1817-1890 | オランダ王 |
| 19 | ・ポルスブルック (Dirk von Polsbroek) | 1833-1916 | 元駐日オランダ公使 |
| 20 | ・ポンペ (Pompe von Meerdervoort) | 1829-1908 | オランダ 医師 |
| 21 | ・ヴィルヘルム一世 (Wilhelm I) | 1797-1888 | ドイツ帝国皇帝 |
| 22 | ・ビスマルク (Otto L. F. von Bismarck) | 1815-1898 | ドイツ帝国首相 |
| 23 | ・アレクサンドル二世 (Aleksandr II) | 1818-1881 | ロシア皇帝 |
| 24 | ・ゴルチャコフ (Aleksandr Gorchakov) | 1798-1883 | ロシア首相兼外務大臣 |
| 25 | ・クリスティアン九世 (Chrstian IX) | 1818-1906 | デンマーク王 |
| 26 | ・シッキ (Julius Frederik Sick) | 1815-1884 | デンマーク外交官 |
| 27 | ・ティットゲン (Carl Fredelik Tietgen) | 1829-1901 | デンマーク実業家 |
| 28 | ・オスカル二世 (Oskar II) | 1829-1907 | スウェーデン・ノルウエー王 |
| 29 | ・エマヌエレ二世 (Vittorio Emanuele II) | 1820-1878 | イタリア王 |
| 30 | ・ドスチアーニ (Alessandro F.D'ostiani) | 1825-1905 | 駐日イタリア公使 |
| 31 | ・フランツ・ヨゼフ一世 (Franz Joseph I) | 1830-1916 | 奥皇帝・ハンガリー王 |
| 32 | ・エリザベート (Amalie E.Elizabeth) | 1837-1898 | 奥皇后・ハンガリー王妃 |
| 33 | ・アンドラーシ (Gyula Andrassy) | 1823-1890 | 奥・ハン帝国外務大臣 |
| 34 | ・シーボルト (Heinrich P. von Siebold) | 1852-1908 | 奥・外交官・通訳官 |
| 35 | ・セレソール (Paul Ceresole) | 1832-1905 | スイス大統領 |
| 36 | ・アンペール (Aime Humbert) | 1819-1900 | 元駐日スイス公使 |

1 ユリシーズ・グラント (Ulysses S. Grant 1822-1885) アメリカ大統領



南北戦争の英雄・大統領引退後来日し、明治天皇にも逢う

オハイオ州生まれ。ウエスト・ポイント陸軍士官学校卒業後、米墨戦争に従軍して勲功を立てる。南北戦争中の1864年に北軍総司令官となり、リンカーンを助けて北軍を勝利に導き、南北統一の立役者となる。その後、臨時陸軍長官の時、大統領ジョンソンの政策に反対し共和党から立候補、1868年の大統領選に勝ち、1869年18代米大統領となって、1877年までの二期八年を務める。個人的には人気があったが、閣僚や配下の汚職とスキャンダル、荒廃した南部の再建やインディアン政策に失敗して、支持率は急落、史上最低の大統領との評価さえあるのは、少し気の毒な感じがする。

岩倉使節団が訪米した1872年はどんな時代か。アメリカが完全な独立を果たしたのは1783年である。1853年にペリーが浦賀に来航して日本の門戸を叩き、翌1854年日米友好通商航海条約締結。1858年にはハリスとの間で日米修好通商条約が結ばれ、その批准のために万延元年(1860)新見遣米使節団がワシントン、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアを訪問して大歓迎を受ける。新見使節団がアメリカ回りで帰国すると、日本は桜田門の変(井伊直弼大老の暗殺)が起こっており、激動の幕末を迎える。一方、米国の第16代大統領リンカーンはその治世(1861-65)を奴隷解放と南北統一に向けて南北戦争を戦い、北軍の勝利の末、1865年憲法を改正して奴隷制廃止を宣言し、直後に暗殺される。だが実際に黒人が自由を得るまでには、100年後の1964年のキング牧師によるワシントン大行進による公民権法獲得まで待たねばならなかった。一方、日本は1868年に明治維新を実現し、4年後の1871年、政府要人による米欧回覧の岩倉大使節団派遣の運びとなった。

太平洋にはすでに横浜・サンフランシスコ間に定期船が就航しており、アメリカも1869年、ユニオン・パシフィック社の太平洋から大西洋まで大陸横断鉄道が完成したばかりの時代である。特別仕立てのプルマン寝台車が用意されサンフランシスコからワシントンへ向かった岩倉使節団一行は1872年3月、グラント大統領と会見した。その際大統領はキリスト教禁教を続ける明治政府の政策を非難し、琉球の帰属問題にも介入したと言われるが、日本からの使節団をもてなすために議会に5万ドルの特別予算を要請する配慮もしている。グラントは、大統領引退後の1879年、国賓待遇で米国大統領経験者として初の訪日を果たし、浜離宮で明治天皇とも会見し、天皇に憲法、国会、条約改正などを助言した。(2015・1・17 『1872年の日米関係』マーチン・コルカット、他)

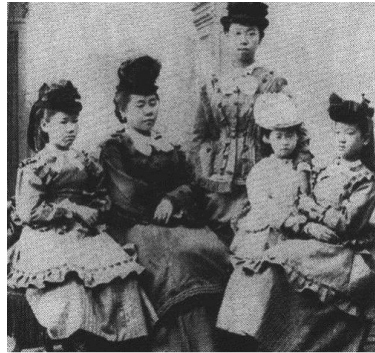
2 フィッシュ (Hamilton Fish 1808-1893) アメリカ国務長官



米国史上最高評価の国務長官。日米条約改定交渉は進めたが実らず。

ハミルトン・フィッシュは1808年にニューヨークに生まれる。コロンビア大学を卒業し弁護士となる。1842年下院議員。1848年ニューヨーク副市長を経て、1849-50年の2年間ニューヨーク市長。1851-57年上院議員。ウィッグ党解体で、民主党のキューバ政策を嫌い共和党員となる。穏健な奴隷制反対論者。ヨーロッパに旅行して帰国した1860年、アブラハム・リンカーンの大統領選を支援し、南北戦争中は北軍連邦防衛委員会議長として、捕虜交換に尽力する。一旦、政界引退すると思われたが、1869年グラントが大統領となると、いきなり国務長官に任命されて、2期8年間のグラント政権を支えることになる。グラント大統領の個人的人気とは別に何かと問題多い政権の中で、グラントはフィッシュに全幅の信頼を寄せていた。フィッシュは南北戦争中に南部側で使われた英軍艦アラバマ号事件を国際法令に準拠して無難に収めると、キューバ独立紛争では中立を保ちつつ、スペインとキューバの仲介に立ち、南米諸国とスペイン間の平和条約を推進した。1875年にはハワイと互惠通商条約を締結する。インディアンの襲撃問題やメキシコの国境問題などの若干の積み残し案件はあったものの、8年の任期を終えると政界から清く引退したことや国際紛争は軍隊出動ではなく、話し合いによる原則を貫くなど穏健な政治手法もあって、米国史上で最高の国務長官との評価を得た。グラント大統領の低評価と、フィッシュの高評価は奇妙な組み合わせというべきか。岩倉使節団とは1872年3月中旬から7月末までの期間に、11回に及ぶ息の長い日米修好通商条約改定交渉に根気よく付き合い、結局は、日本側の判断で交渉は成立しなかったが、条約改正には天皇陛下の正式委任状が必要と示唆したのはこのフィッシュであった。サンフランシスコ滞在時、使節団は完成したばかりの電信機を使って、ワシントンのフィッシュや発明者モールスとの交信を体験している。(2015・1・18 『US Department History』、ほか)

3 チャールズ・デロング (Charles E. DeLong 1832-1876) 駐日米特命全権公使



条約改正交渉の仕掛け人？ 沖縄日本帰属の恩人？

デロングはニューヨーク出身の政治家・外交官。西部・カリフォルニア州での弁護士をへて、1857年に州下院議員を2期務め、1869 - 1874年の間、駐日弁務公使と特命全権公使を務めた。1871年岩倉使節団に同行して、夫妻で一時帰国。岩倉使節団の通訳や旅行中の面倒を見た。駐日英国公使ハリー・パークスと何かとメンツを張り合う面があり、岩倉使節団も当初、回覧を西回りで英国から始まる予定が、デロングの強い意向で、東回りが実現したと言われる。同行したデロング夫人は、使節団一行に加わった5人の少女留学生の面倒を見て、旅行中献身的に付き添い、ワシントンで森有礼代理公使に無事手渡して役目を終えた。この5人の留学生（津田梅子、山川捨松、上田梯子、吉益亮子、永井繁子）は、当時日本公使館書記官をしていたワシントン郊外のジョウジタウンにあるチャールズ・ランマン夫妻宅に預けられ寄宿舎での教育を受けることになる。

ワシントンに於いて、使節団が当初の予定になかった条約改定交渉に踏み込んだのは、中央政界に進出の野心をもつデロングと駐米代理公使森有礼が伊藤博文を説いて、岩倉、大久保、木戸などの使節をその気にさせたと言われる。

1870年からハワイ公使も兼ねていたデロングは、明治4年、外務卿沢宣嘉と外務大輔寺島宗則との間で、日本・ハワイ修好通商条約に調印した。ハワイが米国へ合併したのは1898年であることを考えると、すでにその前から、ハワイは米国の官僚に外交も支配されていたことを示している。尚、使節団が米欧回覧から帰国後の明治6年の政変を経た1874年に日本は台湾への出兵を決めるが、その判断の裏には、デロングとデロングの紹介で外務省に雇われることになる仏系米国人・チャールズ・レジェンドル（元米国廈門公使 1867 - 72）とが、時の外務卿の副島種臣に、台湾は蕃地無主の地（化外の地）であり、どの国にも主権が及ばない蕃地は先んじた国が領有することが可能と示唆したことで、副島が熱心になり、大久保利通と大隈重信を説得して『台湾蕃地処分要略』に至ったと言われる。台湾出兵は結果的に、清に朝貢して冊封関係にあった琉球（沖縄）の日本領有を決定づけた歴史的な事件なので、デロングの間接的貢献と言えよう。（2015・1・19 『明治初年の琉球：台湾事件をめぐって』 - 水野智仁氏、他）

4 チャールズ・ブルックス (Charles Wolcott Brooks 1833-1885)

初代駐サンフランシスコ日本領事



幕府時代から、サンフランシスコ日本領事の米国人

ブルックスは1833年ボストンの郊外で生まれ、フランスで教育を受け、1854年頃にはサンフランシスコを本拠としてハワイとの貿易で成功していた。なぜか日本人に親愛の情を持ち、1860年に咸臨丸が入港した頃は、費用自弁の自称日本領事として、50数日間にわたり咸臨丸一行の面倒を見ている。その後、咸臨丸で亡くなった水夫3人の墓を建て供養した。当時、横浜・サンフランシスコ間の定期航路が開設され、日米間の往来も増えたので、駐日米国公使は、ブルックスへの領事依頼を幕府に提案し、1867年サンフランシスコ領事に幕府が委嘱し、そのまま明治新政府も踏襲した。岩倉使節団のサンフランシスコ滞在中もよく面倒を見たので、岩倉大使一行の信頼を得て、ワシントンへの随行を命ぜられ、条約改正交渉での岩倉大使発言の通訳も務めている。

その後も、岩倉使節団に欧州まで随行して、一次所労で帰国したが、再びドイツで落ち合い、そのまま岩倉使節団と共に日本まで行動を共にしている。帰国後、岩倉大使の推奨で、幕府時代より米国に渡航した日本人の便宜を図り、遣欧使節に随行した際も、一方ならず尽力してくれたと、1873年10月14日御学問所で明治天皇に謁見が実現、勅語と天皇の写真を賜った。同年、12月、サンフランシスコに副領事として高木三郎が赴任したのを機に、ブルックスは領事助勤となった。翌年、吉田清成駐米公使がブルックスにワシントンへの転勤を命じたが、ブルックスはこれを辞退して辞表を提出した。明治政府は、報謝金1000円を贈った。1885年、まだ52歳の若さで腎臓病でなくなった。1868年に、奴隷契約とは知らずにサインして、オークランドで牛馬と共に働かされていた14歳の高橋是清の帰国を助けたのも彼であった。

(2015・1・20 『チャールズ・ウオルコット・ブルックスと岩倉使節団』 三原浩氏)

5 ロールストン (William Chapman Ralston 1826-1875)

カリフォルニア銀行創業者



サンフランシスコの父 愛すべき鉱山王 最後は謎の変死

オハイオ州 Wellsville 生まれ。ミシシッピの河舟の船員から身を起し、1849年のゴールド・ラッシュに乗じ、カリフォルニアで金を発見する。その後一旦パナマに移り、金融、海運会社に入って、一獲千金を求め、49年のフォーティナイナーが、パナマ経由で北米東岸から、カリフォルニア州に渡る船の運航に携わる。1854年からはサンフランシスコに定住し、ネバダの Comstock Lode の銀鉱山に注ぎ込み、いくつかの銀行に関わった上、Darius O. Mills と共同で、カリフォルニア銀行を創設する頃にはカリフォルニアで最もリッチな実力者と呼ばれる。

岩倉使節団はサンフランシスコでこのロールストン氏の率いる実業家の大歓迎を受ける。招待されて芝居を見たカリフォルニア劇場はロールストンが1869年に建てたものである。ベルモントの彼の別荘では、70人の実業家を集めて、使節団36名を含め106名の大宴会を開いて接待され、岩倉らも音楽や舞踏に堪能したようだ。この別荘は、Ralston Hall と呼ばれ、今もノートルダム・ナムール大学のキャンパスに属し、歴史建造物に指定されている。

今も「サンフランシスコの父」「愛すべき鉱山王」と敬愛され、カリフォルニア各地に Ralston Avenue, Ralston Street, Ralston City, Ralston Middle School 等の名を残す彼も、最後は悲劇であった。彼の夢は、サンフランシスコの目抜き通りにパレス・ホテルを建てることで、久米が実記の中で、900万ドルの資産があると言う彼が、500万ドルかけたホテル完成の数週間前に、カリフォルニア銀行の破産があつて、彼は謎の水死を遂げる。自殺とも、変死とも言われる。1872年フィリップ・アーノルドの金山詐欺事件、1873年カリフォルニア干渉の後で、彼が起こした灌漑水利事業の売却がうまく行かなかった等で、銀行株が暴落したことが原因とも言われる。

富豪の彼が今も愛されるのは、足長おじさんとして、貧しい子らの教育を助けたり、非行少年に商売を教えたり、どんな身分の客にも銀行の窓を開いた人柄によるようだ。

(2015・1・21 『The Virtual Museum of the San Francisco』、ほか)

6 チャールス・ランマン (Charles Lanman 1819-1895) 駐米日本公使館書記官



ジャーナリスト・文人画家で森有礼の私設秘書

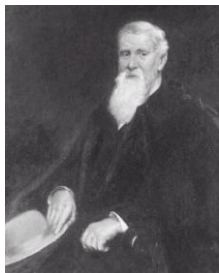
ミシガン州モンロウの名門の家に生まれる。図書館司書、探検家、執筆家、画家、上院議員秘書、日本公使秘書など多彩な顔を持つ人。1835－1845年の10年間、ニューヨークの Hudson River School では、色んな芸術家と出会う。1845年よりはジャーナリストとして、Monroe Gazette, Cincinnati Chronicle, New York Express などの編集者を歴任。1849年以降は陸軍省や国会など政府関係図書館の司書を、20年余り務める傍ら、国会議員の自伝を集めて、その事典を発刊したり、ロッキーなど米国の自然景観の地を精力的に歩いて、スケッチ旅行の成果を油絵にして展覧会を開いたり、エッセイと共に多彩な書物にして刊行して、「アメリカの絵画風探検家」の評判を得ていた。著作は30冊余にわたる。米下院図書館の館長を務めていたランマンは52歳の1871年9月から1872年8月まで駐米少弁務使・森有礼（26歳）の私設秘書として雇われる。森に乞われて『Life and Resources of America』を執筆、森が緒言を書いて監修し日本語に訳して発表しようとしたが出版は果たせず、日本から米国への留学生の間では英語で読まれたと言う『The Japanese in America』（米国在留日本人）もランマンが仕上げた。

岩倉使節団に同行渡米した5人の女子留学生は、森の依頼で、ワシントン郊外にあるジョージタウンのランマン夫妻の家にホーム・ステイすることになる。その後、吉益亮子と津田梅子はランマン家に残り、山川捨松、永井繁子、上田梯子らは、近くのランマン夫人の妹の家と、ジェームス・ヘボンの兄の家に分宿することになるが、津田梅子は以降11年間ランマンの妻 Adeline の庇護と影響を受けることになる。

ランマンは、その後日本公使吉田清成の秘書を1882年まで勤めて、1895年ジョージタウンで亡くなっている。

(2015・1・21 鵜飼直哉氏『The Japanese in America』)

7 クック (Jay Cooke 1821-1905) 銀行家



フィラデルフィアの豪邸に招かれて使節団は私邸に二泊する

オハイオ州の Sandusky にて、弁護士でホイッグ党員の家に生まれる。17歳でフィラデルフィアに出て、私設銀行に事務員として入り、4年後そこの共同経営者となり、37歳で退社して、Jay Cooke 銀行を開業したのが、アメリカの南北戦争が始まる一か月前の1861年1月であった。戦争が始まると、すぐにペンシルバニア州が300万ドルの戦争資金を借りに来る。次に、チェイス財務長官に働きかけ、5億ドル国債の販売代理店を引き受け、新聞に広告を載せ、2500店のサブ代理店を任命して国債を売り切った。それがワシントンとフィラデルフィアでのナショナル銀行創設を促した。1865年に入ると政府は再び財政の逼迫を迎えるが、ナショナル銀行は国債を売りきれず、クックに依頼が来る。クックは直ちに全国津々浦々まで代理店を送り込み、新聞宣伝を展開し、8億3000万ドルの国債を完売し、戦い終盤の北軍兵士の補充と給料を賄うことができた。彼の努力は愛国的貢献として賞賛されたが、一方で大儲けしたので汚職を疑われもした。

岩倉使節団は1872年6月22日－24日の2泊3日でフィラデルフィア郊外のオゴンツにある100万ドルの豪邸に招待される。初日は、鉱山に出張中のクック氏が汽車の都合で戻れず、弟のコロンビア州知事によってもてなされるが、翌日戻ったクックは不在を詫び、計画中のノーザン・パシフィック鉄道構想を熱く語り、大西洋－五大湖－鉄道－バンクーバー－太平洋－日本の貿易ルートの夢を説明する。この計画は、1873年の恐慌もあって挫折し、クック商会も破産に見舞われるが、その後の銀鉱山投資が実り、再び、晩年は富裕を取り戻し、1905年オゴンツの自宅で亡くなった。

Jay Cooke State Park, Cook City(Montana), Jay Cooke Elementary School, Cooke street などクックの名を今に残すのは、信心深い慈善家として、収入の10%は毎年、宗教や慈善事業に寄付し、フィラデルフィア神学校やいくつかの教会建設を支援している実績によるのだろう。(2015・1・21 『米欧回覧実記』－久米邦武、ほか)

8 ウィリアム・パーソン (William Edwin Parson 1845-1905) 牧師



回覧中の木戸孝允の個人教師から、東京大学教授に

1845年ルーテル派教会牧師の息子として生まれ、神学校卒業後ワシントン D.C.でルーテル派教会 **The Church of the Reformation** の創設に当たり初代牧師となる。

岩倉使節団とワシントン滞在中に出会い、牧師を辞任して木戸孝允の英語教師となる。以降、木戸孝允の米欧回覧に同行し、明治6年7月23日の帰国まで木戸に帯道して来日する。木戸は米国へ帰国しようとしたパーソンをお雇い外国人として推挙し、東京開成学校で数学と物理の教授として採用、後に東京大学となると理学部教授を務める。

木戸孝允に心底心酔していたらしいのは、「木戸は、高貴な魂を持ち、飾り気がなく、愛情深い性質で、人が良かった。忠孝の心が篤く敬虔であったが、キリスト教への信仰心はなかった」と言い、自分の長男にキド・パーソンと名付けている。

木戸が1877年に亡くなると、4年の任期を前に、1878年7月に辞任して帰国する。在任中は、横浜YMCAで講演したり、宣教師ヘンリー・フォールズの訓盲社楽善会（東京盲啞学校）の創設に協力したり、モースの大森貝塚発掘の際の協力者として名前を挙げられたりしている。しかしキリスト教と進化論の関係に関しては、モースとは反対に「キリスト教と進化論とは矛盾しないが、進化論によって宇宙創造のすべてが解明されるわけではない」との立場をとっていた。帰国後は、牧師職に戻り、ハワード大学でヘブライ語、ギリシャ語を教えた。

1886年、新島襄も通ったアメリカのアンドーヴァー神学校で、「アンドーヴァー論争」という神学論争があった。そこで、キリストを受け入れない異教徒は、全て地獄に落ちるとの教義解釈に対し、「木戸はキリスト教徒ではなかったが、彼は言葉や信仰や文化を超えて、広く友情を捧げることができる、誠実な友人だった。どうしてキリストが彼を見捨てるだろうか」と疑問を呈した。

(2015・1・22 『お雇い米国人科学教師』(渡辺正雄)北泉社、「朝日日本歴史人物事典」など)

9 フォン・ブランド (Max August Scipio von Brandt 1835–1920)

駐日ドイツ公使



『ドイツ公使が見た明治維新』の著者

プロイセン王国の将軍で軍事著述家のハインリヒ・フォン・ブランドの息子としてベルリンに生まれる。プロテスタントの堅信を受け、ベルリンのフランス・ギムナジウムに学ぶ。最初軍人となり、1860年のオイレンブルク伯爵の率いるプロイセン王国東アジア使節団に武官として随行し、1861年の日普修好通商条約調印に立ち会う。1862年プロイセン初代駐日領事として横浜に着任した。以降、ドイツの国名の変転もあって、駐日北ドイツ連邦総領事、駐日プロイセン王国代理公使と役職名は変わったが、1872年には、改めて駐日ドイツ帝国全権公使となる。岩倉使節団が米国で条約改正交渉を始めたとの報を受けて、英国代理公使のアダムスと示し合わせて同じ船で渡米し、ワシントンにて岩倉具視・木戸孝允に対し、片務的最恵国待遇条項「一旦米国に有利な条項を結んでしまうと、交換条件として、たとえ日本に有利な部分があっても、外国側に有利な部分のみ自動的に全条約国に適用されてしまう」の存在をご存知かと説いた。日本側はそこまで条約理解が及んでいなかったのが驚愕し、結局これが米国での条約交渉中止とその後の欧州条約締結諸国との慎重な条約交渉態度への決定打となった。

ブランドは1875年、清国大使となって離日するので、幕末維新の15年間一貫して日本との外交に携わり、日本を見続けたドイツ人である。その後、朝鮮との通商修好条約との締結をするなど、東アジア通として、『東アジアにおける33年間』（日本部分訳は『ドイツ公使の見た明治維新』で発刊）や『東アジアの3年間—1894-97年』等の著作を残している。

戊辰戦争中に会津・庄内両藩が軍資金に詰まって、根室・留萌など支配の蝦夷地を割譲する相談を持ちかけたようで、ドイツ本国に北海道の一部植民地化を打診したのもこのブランドである。幸い、内訌（内戦）中は中立を守るべきとのドイツ帝相ビスマルクの判断で沙汰やみになった経緯もある。

明治初のどさくさまぎれに名古屋城取り壊しや金鯱の鋳潰しの話があった時には、ブランドが日本政府に反対を訴えた為に、名古屋城と姫路城の城郭が守られたとの逸話もある。日本への西洋リンゴ品種が伝わったのは、津田仙がブランドから貰った苗木の栽培を成功させたのが最初で、そのリンゴは「黄随円」と名付けられたともいわれている。

(2015・1・23 『ドイツ公使の見た明治維新』—原潔、永岡敦訳 など)

10 ヴィクトリア女王 (Alexandrina Victoria 1819 - 1901) イギリス女王



在位64年の大英帝国最盛期の女王

ヴィクトリア朝64年の間、大英帝国は世界中の非白人国家、民族集団に対し、覇道の限りを尽くし、その領土を10倍に拡大させ、地球の全陸上面積の1/4、世界人口の1/4を支配する史上最大の帝国となった。64年の治世で戦争のなかったのは2年間と言われるほど、世界中で戦争をしていた。植民地の統合の象徴は『女王陛下の臣民』で「良い帝国主義は平和を維持し、現地民を教化し、飢餓から救い、世界各地の臣民を忠誠心で結びつける。英国は世界に敬愛される帝国主義」だと信じていたようだ。実際、植民地の反乱も、国王でなく女王であることが強みで、帝国の母として尊敬されていたので少々の圧政があっても、致命的な反乱が防げたとも言われる。

岩倉使節団が訪英した時は、産業革命の真最中で、テムズ河には13の橋が架かり、街中には高架鉄道や地下鉄が縦横に走り、蒸気機関による工業化が進んでいて、石炭を濛々と焚いて天を焦がすようなスモッグの街であったが、活気に満ちて、ヴィクトリア女王は53歳の最も脂の乗り切っていた時期。使節団が到着した時は、すでに女王はスコットランドの離宮で夏の長期休暇に入っていて、謁見を待つ間の4か月近くを、たっぷりと英国の各地を回覧し、工場や諸施設の見学に費やすことができ、英国の富裕の因って来るゆえんをよくよく勉強する機会となったのは幸いであったといえよう。

上海領事のオールコックは言いなりにならぬ清国への武力行使論を説き、1856年のアロー戦争(第二次アヘン戦争)をフランスのナポレオン3世と仕掛けて、天津・北京条約に持ち込んだのが1860年。印度を植民地化したのが1858年。使節団が帰国後の1874年には西アフリカ・ゴールド・コーストのアシヤンティ族を討伐。1876年には南ア・ズールー族討伐。1882年エジプト保護国化。1876年インドの女帝となるなど、岩倉使節団回覧は世界も英国も生々しい時期だったことが分かる。

ヴィクトリア女王は、伯父ウィリアム四世の死後、18歳で即位。当時の首相メルボーン子爵を敬慕し、君主としての薫陶を受ける。従兄アルバート公と結婚後は、夫の助けを得て王室の権威を高めた。1861年にアルバート公が死去すると、ロンドン万国博にも欠席して10年間の服喪を宣言した。英国議会は政党政治の混迷を極めたすえに、自由党と保守党の二大政党が確立する。そのこともあって、女王の晩年は立憲君主に徹することになる。使節団は産業革命に依る英国の繁栄の光の部分だけでなく、労働者の平均寿命が30歳を切っている悲惨な面や貧民窟の存在などの影の部分もしっかりと観察している。(2015・1・24 『米欧回覧実記』-久米邦武、他)

1 1 グランヴィル (George Leveson-Gower Granville 1815-1891) 英国外務大臣



自由貿易主義、非同盟主義で英国を欧州戦争から守る

岩倉使節団が英国を訪れた時期の英国首相は William Gladstone (グラッドストーン) であった。グラッドストーンは、ヴィクトリア女王と対立していた。王権を制限して立憲君主制度下で、自由貿易と非同盟平和外交を推進していた。二期に亘るグラッドストーン政権で、一貫して外務大臣を務めたのがグランヴィル氏であった。忍耐、平和、非同盟が彼と首相の外交政策であった。同盟は仮想敵国を作る。それがお互いの緊張と疑心暗鬼を生む。欧州各国は、お互いに牽制しあって、きな臭い時期であったが欧州の戦争には拘わらずに済んだのは、グラッドストーンとグランヴィル路線の成果であった。アメリカとの関係は、市民戦争(南北戦争)の際に起きたアラバマ号事件と漁業権問題が懸案であったが、米国国務大臣フィッシュという良き交渉相手を得て国際調停で解決した。それが、岩倉使節団が訪英した 1872 年のことであった。イギリスの覇権的帝国主義と各国への干渉が一番少なかった時期とも言えよう。(但し、ヨーロッパ以外のアジア、アフリカ植民地への態度は、ヴィクトリア女王のところで見た如く別であったが)

岩倉大使とは 3 回に亘り、条約問題を話し合っているが、英国側は、英国人の内地での自由な旅行と日本沿岸貿易の解放、キリスト教の解禁などを求め、日本側は、反対に関税自主権を主張し領事裁判権の放棄を求めたが会談は平行線を辿り進展はなかった。岩倉らは、日本の近代化(憲法、民法、国会などの法制化)が、不平等条約解消の前提であることを実感する。この一連の会談には、常にパークスと寺島宗則が同席し、通訳はアストンが務めている。

グランヴィルはイートンとオックスフォード・クリスト・チャーチで教育を受け、一時パリで暮らしたが、英国に戻ると、50 年以上一貫して政界に身を投じて、3 回の外務大臣と、2 回の植民大臣を経験、上院で 30 年余り、自由党を率いる。1848 年貿易委員会の副会長の時、1861 のロンドン万博の推進役を務める。1856 年にはロンドン大学総長となり、以降 35 年間その任にあった。1864 年にはケンブリッジ大学の名誉学位を与えられる。実業界でも活躍し、石炭と鉄鉱石鉱山を持ち、シェルトン鉄鋼会社の筆頭株主となり、1873 年には、8 基の溶鉱炉、97 基の製錬炉を稼働させていた。

(2015・1・30 『米欧回覧実記』一久米邦武、ほか)

12 パークス (Sir Harry Smith Parkes 1828 - 1885) 駐日イギリス全権公使



明治維新誕生に最も係わった外国人

イギリスの鉄工場主の長男として生まれるが、両親が早く死んだために、1841年に二人の姉を頼って、清（中国）のマカオに渡って中国語の勉強をして、15歳で広東領事館に採用される。1844年厦門領事館通訳になった頃から、領事のラザフォード・オールコックに見込まれる。十年後に厦門領事に昇進。1855年には全権委員として英国・シヤム条約を締結。1856年には広東領事として、アロー号事件（第二次アヘン戦争）に介入する。1860年9月、英仏連合軍の北京侵攻にあたり全権大使エルギン伯の補佐官兼通訳を務めていたが交渉中に清軍に拉致され、一年間北京で投獄される。1864年上海領事に昇進。1865年に、四国艦隊下関砲撃事件での行動が英国政府の意に沿わないとして駐日公使を解任されたオールコックの後任として来日する。従って、来日当初は、日本には威圧的な態度をとっている。下関では高杉晋作と伊藤博文らとの終戦会談にも臨んでいる。その後、鹿児島で薩摩藩の島津久光親子・西郷隆盛・寺島宗則と会談したり、第二次長州征伐が始まると、長州藩の桂小五郎・伊藤博文と幕府老中小笠原長行との双方に接触し調停を試みるが失敗。1867年には徳川慶喜と会って、「今まで日本であった最も優れた人物」と絶賛している。イギリス海軍教師受け入れで軍艦奉行勝海舟とも会い、土佐では後藤象二郎とも会談している。後に明治維新誕生に関わることになる日本側の主要人物のほとんどと面識を持つようになる。このことは、江戸城無血開城と徳川慶喜処分に際し、西郷隆盛と勝海舟に影響力あるアドバイスを与えることに繋がる。一方で、パークスは外国公使団を説得して、倒幕・戊辰戦争を通じて外国勢は局外中立を保ち、明治新政府を諸外国に先駆けて承認するなど、常にリード役を演じている。岩倉使節団が訪英した時は、パークスは休暇中で英国におり、全面的に使節団の英国内回覧のアテンドをし、岩倉大使とグランヴィル外相との条約改正予備交渉に同席して、主導的役割を果たしている。駐日公使在任中は、北海道から九州まで日本各地をくまなく視察旅行をし、夫人との富士山登頂も果たしている。滞日18年間に亘り、日本に対し西洋文化の導入と、日本の近代化、日英交流に貢献した後、1883年清国公使に転出し、駐韓公使も兼ねたが、1885年北京でマラリアに罹り、57歳で没した。

来日までのパークスは、アジアに対し高圧的な態度に終始しているが、日本に来てからの彼は、かなり親日的態度に変わったと見てよいのではないかと。

(2015・2・2 『遠い崖』－萩原延壽、他)

13 アームストロング (William Armstrong 1st Baron Armstrong 1810-1900)



日本で活躍したアームストロング砲の発明者

岩倉使節団がニューカッスルに行ったとき、アームストロングの案内で、彼の工場を視察している。回覧実記の著者久米邦武は「アームストロング氏は年齢70歳（実際は61歳だった）、六尺豊かな、寡黙だが穏やかな年寄りで、顔つきは決して鋭敏という感じではない」とその風貌を表現している。アームストロングが岩倉使節団を工場に招いたのは、大砲の売り込み先との期待があったからだろう。工場では、アームストロングが発明した「水力を使ったクレーン」「水圧式アキュームレーター」「ガトリング砲」「140ポンドの大砲」「250ポンドの大砲」などを見ている。アームストロング砲は、幕末維新の日本でも、馴染みの深い大砲であった。久米の出身である佐賀藩は幕末までに、長崎でアームストロング砲を購入して、その国産製造を試みている。アームストロング砲が、世界で初めて実戦に使われたのは1863年の薩英戦争の時と言われる。その時に21門から放たれた365発の内、28回が不発だったようだ。戦艦上では、性能の安定が悪いことが英国の試射実験で問題視されて、国内では使用禁止となっていた。1860年以降はアメリカの南北戦争向けに売られて、南北戦争終了後に日本に転売されて来たともいわれる。更に、明治維新の際、上野戦争で大村益次郎がアームストロング砲を使って、1日で反乱軍を壊滅させたと言われるが、この時、使われたアームストロング砲はアメリカ流れのものか、佐賀藩の作った模造品か、佐賀藩がグラバー経由輸入したものかは今も論争の的となっている。幕末に幕府がグラバーに35門を発注したが断られたとも言われている。それが、幕府の終焉に繋がったのだろうか。

アームストロングは1810年に英国ニューカッスルに生れ、父親は穀物商で、ニューカッスルの市長も務め、息子を弁護士にしたいと、グラマー・スクールに通わせ、父親の友人の弁護士のところで修業させ、ロンドンで法律教育を受け、11年間事務弁護士として働いた。趣味の釣りをしているときに、水車が採石場の動力として使われているのにヒントを得て、水力を使った回転エンジンを設計し、それを使った水力クレーンの発明に繋がり、アマチュア・科学者として王立協会のフェローに選ばれて、次第に技術発明家としての道に進む。18ポンド砲を制作して、その特許を英国政府に譲与し、その見返りにナイトの称号を得ている。その後、戦艦の会社を作ったりしているが、彼は技術に関心があり、経営にはあまり意を注がなかったともいわれる。兵器産業に携わったことに罪悪感はないようで、慈善実業家との顔も併せ持っている。

(2015・2・6 『米欧回覧実記』－久米邦武、他)

1 4 ブラントン (Richard Henry Brunton 1841-1901) 灯明台築造方首長



日本の灯台の父、お雇い外国人第一号 英国で日本を PR する

慶応4年8月から妻子と助手を伴って来日して、日本各地で灯台建設に励んでいたブラントンは岩倉使節団訪英を機に休暇を得て帰国し、ロンドンの「タイムズ」紙に、匿名(B)で寄稿した。その中で、岩倉使節団を迎える英国の関心の薄さを嘆き、日本が如何に近代化しようと努力しているか。日本は豊かな鉱物資源、美しい風土、豊穡な植物、聡明な国民、開明的な政府を持つ国で、西洋文明を取り入れようと、米(200名)、英(250名)、フランス(50名)、独逸(40名)の留学生を送って懸命に努力している。国内ではすでに、フランス人技師の指導による横須賀製鉄所、イギリス人の関与した灯台、東京・横浜間の鉄道、電信、大阪造幣寮の建設、東京の都市計画などを列挙した上で、岩倉使節団は政府の最有力者によって構成され、アメリカでは行く先々の都市で、官民の大変な歓迎を受けていることやアメリカ政府は、使節団歓迎のために5万ドルの特別接待費を議会の満場一致で可決したことなどの具体的例を挙げて関心を喚起すべく啓蒙した。その投書を受けて、タイムズ紙は社説で、日本と岩倉使節団の大使、副使の紹介をした上で、彼らの心意気に感じ、イギリスも相応な歓迎をしようと論陣を張った。そして、ブラントンはその後も、パークス駐日公使共々、積極的に使節団の英国各地の視察に同行案内をしている。

ブラントンは1876年(明治8年)に日本を去るまでの8年間に、串本の檜野崎灯台を皮切りに26の灯台、5か所の灯竿、2艘の灯船などを建設し、日本における灯台体系の基礎を築くと共に、灯台技術者の養成に努める一方で、日本初の電信架設(1869年、東京・築地ー横浜間)の提案をし、横浜居留地・日本大通りの西洋式舗装技術の導入による整備、横浜公園の設計に携わる。日本の最初の鉄道建設についての意見書提出、大阪港、新潟港の築港計画にも関与している。

ブラントンは1841年生まれのスコットランド人で鉄道会社の土木首席助手として鉄道工事に携わっていた時、英政府から技師スティーブンソン兄弟を介し、明治政府に派遣する灯台技師として採用され、明治期の500人を超えるお雇い外国人の第一号として来日する。帰国後の晩年『ある国家の目覚めー日本の国際社会加入についての叙述とその国民性についての個人的体験記』を纏めて間もなくの、1901年59歳で永眠した。(2015・2・5 遠い崖ー萩原延壽、他)

15 ティエール (Louis Adolphe Thiers 1797 - 1877) フランス大統領



第三共和政初代大統領 日本美術のティエール・コレクション

岩倉使節団はフランス・パリで1872年から1873年の正月を挟んで、2か月を過ごしている。ここで日本が太陽暦を採用したことを知らされて驚いている。使節団の訪れたこの時期のフランスは、普仏戦争(プロイセン・フランス戦争 1870・7-1871・2)でフランスが破れ、第二帝政の皇帝ナポレオン三世がフランスを追放されていた。敵将のビスマルクはパリを開城し、ヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国の成立の宣言儀式をするという離れ業を演じている。この敗戦処理を一手に引き受けて、敗戦後に発生したパリーコンミュン(1871・3-5・28)一流血の一週間を乗り切って、第三共和政の初代大統領に就任したのがティエールであった。

普仏戦争の講和条件で50億フランの賠償金を払ったと聞いていたので、さぞやフランス国民も街の雰囲気も意気消沈しているだろうと思ってパリに到着した使節団は、ロンドンとはうって変って明るい街並み、クリスマス・新年の時期ともあってパリの市民は活気があって浚刺としていた。賠償金で空っぽと思ったフランス銀行では、金塊で一杯の金庫を見せられ、蓄積の豊かさを実感する。ナポレオン3世のパリ大改造で成った凱旋門を中心とする華麗で整然とした街並み、上下水道を地下に集めた斬新な都市計画、人々は繁華街に集い生活を最大限に楽しんでおり、文化の豊穰さを感じて、久米邦武は「ロンドンにあれば人をして勉強せしむ、パリにあれば人をして愉悦せしむ」と、敗戦後にも拘らず生活を謳歌するパリ市民を絶賛している。

ティエール大統領とは陽暦12月24日に、エリーゼ宮で謁見し、新年の祝賀には各国大使らとともに、一行はヴェルサイユ宮殿に赴いている。久米は「ティエールは温和で小柄な翁で、容貌は尼の如し」と評している。実際に、西洋人にしては、かなりの短軀であったが、弁護士出身の雄弁家で知られている。自由主義者で、ブルボン朝を批判し、1830年の七月革命で、ルイ・フィリップ国王を擁立し、財務次官、内相、首相となる。その後、二月革命で七月王政が倒れると、ルイ・ナポレオン・ボナバルト(ナポレオン3世)の元で働くが、やがて互いに対立して、ナポレオン・クーデターで国外追放となるが、帰国後、第二帝政崩壊を見て、敗戦後の処理に当たる。ティエールの起こした第3共和政は、その後1940年まで70年間続くが、使節団と会った翌年の1873年に政府内の王党派と急進共和派の対立で、辞任を余儀なくされ短い政権におわる。その四年後の1877年、81歳で没している。小柄ながら極めて多感・熱血の人物のようで

ある。彼は、日本の美術品のコレクションとして所蔵の21点の象牙根付をルーブル美術館に寄贈している。『フランス革命史』『執政政府と第一帝政の歴史』など歴史家としての評価が高い。

(2015・2・7 『米欧回覧実記』—久米邦武、岩倉使節団—泉三郎著)

16 シャルル・シャノワヌ (Charles Sulpice Jules Chanoine 1835 - 1915)

フランス 陸軍軍人



日本陸軍の父

フランスの港カレーで岩倉使節団の一行を出迎えたのは、フランス政府より接待係として派遣されたアペール将軍とシャノワヌ大佐であった。シャノワヌは幕末の慶応3年(1867)幕府の軍事顧問団の団長として、15名の陸軍教官団を率いて来日して、横浜の太田陣屋(日ノ出町)と江戸・駒場野で日本初のフランス式陸軍伝習所で、三兵(歩兵、砲兵、騎兵)の導入に努めた人である。明治維新になり、戊辰戦争が始まると、彼は1868年11月に帰国するが、彼の部下であったブリュネ(Jules Brunet)とフォルタン(Jourdan)、ブッフイエ(Bouffier)、マルラン(Marlin)、カズヌーヴ(Cazeneuve)らがイタリア公使館の仮面舞踏会で侍に扮装して脱走し、榎本武揚の開陽丸に乗って箱館至り、五稜郭に籠って共に戦ったのは有名な話であるが、このことは、シャノワヌも暗黙の了解があったとも言われる。

使節団がパリで回覧した時期、旧幕臣の成島柳北も東本願寺の現如上人に随行して、パリに滞在しており、使節団や使節団随行の旧幕臣らと交遊しているが、このシャノワヌとも懐かしい再会を果たしている。成島は幕末に、シャノワヌ先生の下で、騎兵頭を務めていた。尚、幕府がフランスに陸軍の教練を依頼した経緯は、1865年にフランスに横須賀造船所の資材や人材の調達に赴いた柴田使節団が、イギリスとフランスの双方に教師団の派遣を依頼したところ、イギリスには断われ、当時のナポレオン三世が快く引き受けてくれた。そのナポレオン三世が普仏戦争敗戦後英国に亡命していて岩倉使節団も英国遊覧中にその姿を見かけていた。丁度、使節団がパリに滞在中に親幕府だったナポレオン三世の訃報に接しているのは歴史の面白さというべきか。

シャノワヌはその後陸軍大将まで昇進しており、1898年には陸軍大臣も経験するが、大臣として、かのブリュネ少将を陸軍参謀総長に登用している。二人とも日本人のフランス留学生を良く面倒を見たとして、日清戦争後に明治政府から叙勲を受けている。

(2015・2・9 『航西日乗』—成島柳北、『米欧回覧実記』—久米邦武、他)

17 レオポルド二世 (Leopold II Louis Philippe Marie Victor 1835 - 1909)

ベルギー王



コンゴ自由国建設で大儲け 在位 44 年のベルギー王

1873年2月17日にパリを発って、岩倉使節団はベルギーへ向かう。フランス国境駅でベルギーの接待役が待ち構え、ベルギー国境では、音楽隊を伴った将軍が出迎える。翌18日、宮殿からの馬車の迎えで国王レオポルド二世に謁見する。ベルギーは小国ながら英国に次ぎ産業革命が進み、製鉄工業が盛んで、鉄道は大陸で最初に建設されて鉄道網密度は世界一であった。ヨーロッパ各国への資本輸出も活発に展開し、鉄・石炭・錫・銅など鉱物資源が豊富で鉱工業の面でも欧州をリードしていた。100に余る各地・工場見学の提案がなされたが、一週間の日程では見尽くせないと、使節団が精選してベルギー各地を精力的に見て回って、行く先々で大歓迎と接待を受けた。紡績工場、ガラス工場、砲台の演習、製鉄所、そして、ナポレオンと戦って、撃退したウオーターローの戦場跡を見る。ベルギーの国土は四通八達の大要衝で、戦場にもなるが、平時は物流の要所で貿易に適していると使節団は観察している。更に、国土の48%が農業用地で、生鮮食料や牧畜に適し食料自給率が80%と高いこと、国土20%を占める林業でも農家の放縦を規制して統制的に美林を育てる山林行政の存在に注目している。

レオポルド二世は、英ヴィクトリア女王に敬愛された伯父でもある父・レオポルド一世を継承して、1865年即位。普仏戦争では中立を守り、軍事・外交・経済・植民地の諸問題に有能な側近を重用して産業を発展させ国防、国力の充実に努めて、44年間の長期在位を誇った。彼を最も有名にしたのは、使節団が帰国した後の、コンゴ自由国の個人的領有だろう。アフリカ探検家のスタンレーと組んで、国際コンゴ協会を設立し、ベルリン会議で、コンゴ自由国の領有を国際的に認めさせ、コンゴの君主として、その主要産品である天然ゴムと象牙の利権を独占した。アイルランドの発明家ダンロップが折しもタイヤを発明し、天然ゴムの需要が急増して現地住民を強制使役して大きな利益を上げ、原住民の半分が死んだとも言われ、血に染まった「赤いゴム」と揶揄され、マーク・トウェインやコナン・ドイルなどから非難も浴びている。コンゴは最後にベルギー一の植民地となるが、それまでは国王個人の領有地であった。

その財力もあって、「建設王」の異名を持つほどに、今に残るベルギー国内の諸建築に力を入れ、「ロイヤル・トラスト」創設して、国民にもその一部を還元した。

政治的には、ベルギーは1857 - 1880年まで、リベラル派が支配し、労働者の権利の法律化し、少年労働の禁止（但し、12歳以下）、16歳以下の夜間就業の禁止、21歳以下の女性の炭鉱など地下労働の禁止などの政策を推進している。

(2015・2・11 『米欧回覧実記』－久米邦武、他)

18 ヴィレム三世 (Willem III Alexander Paul Frederik Lodewijk 1817 - 1890)

オランダ国王兼ルクセンブルグ大公



堅実な小国の最後の権威を夢見た国王

オランダは江戸時代を通じて、唯一の西洋交易相手で日本はオランダの長崎商館長と蘭学を通じて西洋文明と接してきた。1853年のペリー来航を前に、日本に開国を薦めるオランダ特段風説書を送ってきたのは、ヴィレム三世の父・ヴィレム二世であった。使節団の中には蘭学を学んだ人も多く、一番親しい国であったが、すでにオランダの国勢は往年の勢いを失っていた。使節団は1873年2月25日に首都ハーグの宮殿で、ヴィレム三世国王と謁見した。国王は1849年の即位し、1890年に逝去するまでの41年間在位したが、歴史家の評判はあまり良くない。結婚した従妹のソフィーとの間に3人の子息を得たが、軍隊好きで独裁の権威を振るおうとして国内の知的活動を制限しようとした国王に対し、王妃ソフィーはリベラルな知識人で、二人の考えはソフィーの亡くなる1877年まで交わることがなかった。ソフィーに近い英国ヴィクトリア女王は、国王を「無教育の農民」と罵倒した。性格的にも、衝動的に激怒したり紳士的であったりと気まぐれが激しく、ニューヨーク・タイムズ紙に「時代の最も放蕩者」と書かれたりした。父王のヴィレム二世が、王室の安泰のためにと導入した1848年王権制限の憲法を嫌い、憲法導入に尽力したトルベッケ内閣や気に入らない将軍や内閣に再三干渉し、解任もしたので、リベラル派からは評判が悪かったが、一般国民とは確執はなかったという。

ソフィーとその間に生れた息子三人に相次いで先立たれ、1879年に41歳歳の差のあるエンマと結婚し、のちに二人の間の王女・ウイルヘルミナが18歳になって王位を継ぐことになる。

当時のオランダの人口は、ルクセンブルグの26万人を含めて385万人の小国ながら、インドネシア、西インド、アフリカの植民地には1800万人の人口を擁し、ベルギーが1830年に独立分離するまでは、ベルギーをも包括しており、実記の著者久米邦武は、「オランダは文、ベルギーは武の国」と言い、教育はベルギーと並んで欧州で最高の水準であり、「(オランダ人)は容貌美にして、性質はドイツ人に似て沈重なり」と褒め、海面より低い泥と砂の国土を、風車など使う高い治水技術で耕作地を開拓している勤勉な国民性だと述べている。鉄、木材を輸入に頼り、鉄道、運河、電信、郵便、漁

業、牧畜と特に、海運による通商こそ、小国としての生き方と観察している。

ルクセンブルグ大公としてのヴィレム三世は、ルクセンブルグ憲法を制定しオランダ国王とは別の個人支配と位置づけて、フランスが買いたいと言い出してプロシア・フランス間が紛糾したのを機会に、協定して独立国として死去するまで大公を務めた。死後は男性の後継がなかったので、エンマの叔父が継承し、オランダ国王とルクセンブルグ大公の兼務は、彼の代で終わった。

(2015・2・18 小野 『米欧回覧実記』 一久米邦武、ほか)

19 ポルスブルック (Dirk de Graeff van Polsbroek 1833-1916)

ディルク・デ・グラーフ・ファン・ポルスブルック 元駐日オランダ公使



日本で13年間外交官を務めて、それきり辞めた男

ポルスブルックはオランダ貴族のデ・グラーフ家の一員としてアムステルダムで生まれ、日本で成功を収めたオランダの外交官である。バタビアの植民地政府で勤務した後、1857年6月に長崎出島に二等補佐官として赴任した。1859年7月、横浜の開港に伴い、神奈川副領事となる。1863年7月、日本との外交担当政庁が植民地省から外務省に変わると、ポルスブルックの肩書は駐日総領事兼外交事務官に変わった。1868年駐日オランダ公使となり、翌年新しい首都となった東京で明治天皇に信任状を提出した。1870年に北京への赴任を拒否して、外交官を辞めて帰国した。帰国後は、オランダ通商協会の理事に就任し、ハーグに住み、そこで没した。

使節団が1873年2月25日から3月7日までの11日間オランダ滞在中、各地回覧の政府側の担当として元神奈川領事のファン・デル・タックと共に使節団の接伴係を務め、二人の家にも一行をそれぞれに招き歓待している。ポルスブルックは日本滞在中に、女中として同居していた小山おちょうとの間に長男ピエール(1861年—1914年)をもうけている。帰国してからは、1872年にエリザベート・ロイエールと結婚。5人の子供をもうけるが、そのうちの一人は、のちに駐日オランダ大使、オランダ領インド総督、オランダ外務大臣を歴任したアンドリース・コリネリス・デ・グラーフである。

ポルスブルックは、日本とベルギー、デンマーク、ハンザ同盟、スイス、スエーデン、ノルウェーとの外交交渉も支援し、上記各国の代表や一時的にはプロイセンとスイスの代表も務めた。日本最初の競馬である横浜レーシング倶楽部の設立者の一人でもある。著書に『ポルスブルックの見た幕末事情(東西交流叢書8)』雄松堂出版がある。

(2015・2・19 『米欧回覧実記』 一久米邦武、ほか)

20 ポンペ (Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort 1829-1908)

ヨハネス・レイディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メーデルフォールト 医師



近代西洋医学教育の父

ポンペはオランダ滞在中の岩倉使節団をハーグからライデンに案内している。オランダ海軍二等軍医として、長崎海軍伝習所の第二次派遣教師団であったカッテンディーケの推薦で、第一次海軍伝習所軍医・ヤン・カレル・ファン・デン・ブルークの後任として、1857年に来日、幕府派遣の海軍伝習所御用医・松本良順の後押しで長崎に医学校を開設する。最初の受講生は、松本良順（のち初代陸軍軍医総監）とその弟子12名で、司馬凌海、岩佐純、長与専斎、佐藤尚中、関寛斎、佐々木東洋、入澤恭平など、日本の近代西洋医学の定着に大きく貢献した面々が彼に学んだ。講義は、物理学、化学、解剖学、生理学、病理学など医学関連科目を基礎から教えた。解剖学は、最初、人体解剖紙模型を用いたが、囚人の解剖実習を長崎奉行所に願い出て、反対を押し切って日本初の人体解剖実習も行った。この実習には、シーボルトの娘・楠本イネなど46名の学生が参加した。ポンペは、在日5年間に、14,530人の患者を治療し、外国人によるコレラや梅毒の上陸の阻止に努め、次第に長崎の町の人々の尊敬と信頼を集めて、次第に西洋式病院の建設の機運が盛り上がり、ついに1861年、養生所が長崎港を見下ろす小島郷の丘に完成した。医学校付属の124ベッドを持つ西洋式附属病院で、長崎大学医学部の前身である。

ポンペは貧乏人には無料で診察し、侍・町人、日本人・外国人の区別は一切せず、皆患者を平等に扱った。ポンペの言葉は今も長崎大学医学部の校是となっている。曰く「医師は自らの天職を良く承知していなければならない。ひとたびこの職業を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい。」ポンペは、卒業証書を61名の学生に渡した後、後任のボードインの着任を待って1862年11月帰国した。オランダへ帰国後はハーグで開業し、国際赤十字社にも関与した。帰国時、同船で渡欧した榎本武揚ら留学生の世話をし、75年から二年間駐ロシア公使榎本武揚の顧問役も務めた。

日本最初の化学講義録を残すほか、著書に『日本滞在見聞記』がある。彼の日本史観は、ケッペルのキリスト教的史観でもなく、シーボルトの民俗学的史観でもなく、日本の政治形態を基準に、天皇と将軍の関係史から捉えていてユニーク。

(2015・2・20 長崎大学「ポンペと養生所」)

2 1 ヴィルヘルム一世 (Wilhelm I Fredrich Ludwig 1797 - 1888) ドイツ帝国皇帝



統一ドイツ帝国初代皇帝

兄のプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世が精神病になった1857年に、兄に子どもがなかったので国王代理となり、次いで執政となる。1861年兄王崩御により、63歳で正式に第7代プロイセン王に即位する。即位直後、「統帥権行使に関する勅令」を発し、軍事予算・行政以外の議会の影響を遠ざける大元帥の統帥権が確立、1919年まで続いた。この統帥権の概念は、のちに伊藤博文起草の『大日本帝国憲法』の「天皇は陸海軍を統帥する」(第11条)に影響を与えたとも考えられる。更に衆議院選で自由主義勢力が多数を占めると、軍制改革を巡り衆議院と対立を深め、陸相ローンの推す、駐パリ大使のビスマルクを首相に据えて、軍制改革を断行する。ビスマルクは、1866年の普墺戦争勝利に至るまで、議会承認のない無予算統治を強行した。

普仏戦争では、フランス側のプロイセンへの宣戦布告を受け、それまで反プロイセン勢力だった南ドイツ諸連邦でも「フランスは横暴だ」とのドイツ・ナショナリズムが爆発し、プロイセン支持の世論が圧倒的になり、普仏戦争勝利に結びついた。同時に、この勝利でヴィルヘルムとビスマルクの思惑通りに、南・北ドイツ連邦(プロイセンは北ドイツ連邦のひとつだった)の統一が実現し、1871年1月18日、フランスのヴェルサイユ宮殿に於いて、ヴィルヘルム一世はドイツ皇帝の戴冠式を挙行了。然し、ヴィルヘルム一世は、プロイセンの名が消えてドイツとなることに抵抗して、ドイツランド皇帝を提案したと言われるが、ビスマルクらに説得されて、泣く泣く承認した。こうして統一ドイツ皇帝としてのヴィルヘルム一世の人気は不動のものとなり、民族的英雄バルボロッサ(赤髭王)になぞらえて「白髭王」と呼ばれて国民からは親しまれた。

岩倉使節団とは1873年3月に謁見している。晩年、二度に亘る暗殺未遂事件があったが、1888年、91歳で崩御した。後継の息子フリードリヒも癌で99日後に亡くなったため、皇位は孫のヴィルヘルム2世に引き継がれた。

首相ビスマルクに行政のほとんどは委ね、主体的には政治を行わなかったが、納得できるまで説明を受け、検討し、自身の良心への忠実さ、真剣な態度を常に守り、軍人堅気であるが、嘘もつけず、約束は守り、一度決断したら揺らぐ、他人に対する気遣いを忘れない謙虚な人でもあったといわれる。

(2015・2・22 独逸の歴史、『米欧回覧実記』—久米邦武、ほか)

2 2 ビスマルク (Otto Eduard Leopold Furst von Bismarck 1815-1898)

ドイツ帝国首相



岩倉使節団が多くを学んだドイツ統一を果たした鉄血帝相

ビスマルクはプロイセン東部の地主貴族ユンカーの出身。代議士・外交官を経て、1862年にプロイセン国王ヴィルヘルム一世からプロイセン首相に任命され、軍制改革を断行してドイツ統一戦争に乗り出した。最初の予算委員会での鉄血演説は有名である。「全ドイツがプロイセンに期待するのは、自由主義ではなく武力である。…現在の問題は演説や多数決によってではなく、鉄と血によってのみ解決される」スピノザの国家論「権力は力である」に心酔したと言われる。1867年の普墺戦争の勝利で北ドイツ連邦を樹立し、ついで1871年の普仏戦争の勝利で南ドイツ連邦を取り込んだドイツ帝国を樹立した。プロイセン首相に加えてドイツ帝国首相も兼務し、1890年に失脚するまで強力にドイツを指導した。岩倉使節団は、1873年3月15日ビスマルク夕食会に招かれて彼の演説を聞く。「貴国と我が国は同じ境遇にある。私はこれまで3度戦争を起こしたが、好戦者なわけではない。それはドイツ統一のためで、貴国の戊辰戦争と同じ性質のものだ。英仏露による植民地獲得戦争と同列にしないで戴きたい。私は欧州内外を問わずこれ以上の領土拡大に興味を持っていない」「現在世界各国は親睦儀礼をもって交流しているが、それは表面的のことである。内面では弱肉強食が実情である。・・・万国公法は列国の権利を保存する普遍の法と言うが、大国にとって利があれば公法を守るだろうが、不利と見れば公法に代って武力を用いるだろう。」「我々は数十年かけてようやく列強と対等外交ができる地位を得た。貴方がたも万国公法を気にするより、富国強兵を行い、独立を全うすることを考えるべきだ。さもなければ植民地化の波に飲み込まれるだろう。」米英仏の産業革命による繁栄を見てきたあと、日本と同規模の領土と人口で、欧州では後進ながら、フランスを破ってドイツ統一をやり遂げた、鉄血帝相ビスマルクの親身な忠告は、使節団に強烈な印象を与えた。とりわけ大久保利通は、発展し尽くした先進国より、ドイツ・ロシアに注目し、帰国後、富国強兵、殖産興業を推し進め、天皇と自分の関係も、ヴィルヘルム一世とビスマルクの関係を意識したと思われる。

戊辰戦争中、会津藩と庄内藩が武器購入資金にしようとして蝦夷地の自藩支配部分の植民地化を駐日プロイセン公使のブランドに提案したが、ビスマルクが植民地に関心を示さず却下したことで北海道植民地化を免れたことも想起される。

(2015・2・24 ドイツ帝国の歴史、『米欧回覧実記』一久米邦武、ほか)

23 アレクサンドル二世 (Aleksandr II Nikolaevich 1818-1881) ロシア皇帝



農奴改革を手掛けたが、テロで暗殺された皇帝

岩倉使節団がベルリンを発つ前に、日本から大久保利通と木戸孝允への帰国命令が届いた。留守政府内で政策上の不和が生じ、早く帰れと三条実美からの召還状である。大久保はこれに応じて、ベルリンからパリ経由で帰国の途に就くことになり、木戸は、ロシアやイタリアも見てみたいと、使節団と離れて別行動となる。使節団が、ロシアのサンクトペテルブルグに着いたとき一行は27名に減っていた。ピョートル大帝が建設し、女帝エカチェリーナ二世が完成したサンクトペテルブルグは豪壮な大都市であったが、地球の陸地の七分の一を占める大帝國は、広大な未開の荒涼とした大地と貧しい農奴を抱える半開の国でもあった。久米邦武は、ロシアに入ると、米国、英国、仏国、ドイツなどを経てきたあとだけに、冬の三日月を見ながら、地球の果てに来たような感慨を抱いたようだ。ロシアは欧州では、新進の青年とみなされていて未だ貴族社会で農奴は虐げられて、貿易も外国人に支配されていると看破している。

アレクサンドル二世は、幼いころから帝王教育を受け、独、仏、英、ポーランド語に通じ、軍事・外交・財政にも通じていた。1855年のクリミア戦争中にニコライ一世が崩御し、ロマノフ朝皇帝に就く。しかし、このクリミア戦争に敗北して、国家体制の後進性が露わになり、パリ条約でオスマン・トルコの自由を許し、念願の黒海進出を阻まれる。皇帝は、1861年農奴解放令を公布し、産業・政治の近代化に乗り出すが、皇帝の権力は温存して、自由、民主、民族主義には弾圧で臨んだことや、支配下のポーランドの反乱などもあり、のちに彼は暗殺されることになる。そのテロリストは27歳のソフィアという看護婦だった。ロシア革命とロマノフ王朝滅亡への序章でもあった。

岩倉使節団は1873年(明治6)4月3日に、宮内省より、六馬車一輛、四馬車四輛が差し向けられて、宮内庁長官同伴で宮廷に赴き皇帝に謁見する。滞在中に、皇太子アレクサンドル公(後にアレクサンドル3世)、前年の秋、世界周遊の途中で日本にも立ち寄った、皇帝四男のアクセイ・アレクサンドロヴィッチにも逢っている。このアクセイは明治天皇と馬車で同乗して、横浜の船を訪問しており、その記事がロシアの新聞を賑わし、使節団への興味を掻き立てて、うまく事前宣伝になっていた。

1891年来日中のロシア皇太子ニコライが、巡查津田三蔵に斬りつけられて負傷する天津事件が発生している。この皇太子は、のちに皇帝ニコライ二世となり、日露戦争を戦って敗れ、最後のロマノフ朝の皇帝となる。日露関係の因縁の歴史である。

(2015・2・26 ロシアの歴史、『米欧回覧実記』—久米邦武、他)

24 ゴルチャコフ (Aleksandr Mikhailovich Gorchakov 1798-1883)

ロシア首相兼外務大臣



皇帝の信任熱く25年ロシア外務大臣を務めた欧州屈指の外交官

ゴルチャコフはロシア領エストニアの名門貴族の軍人の息子に生まれ、19歳で外務省に入省して以来、外交官として各地大使館や大使を務め、1856年の皇帝アレクサンドル二世即位から1882年の退位まで一貫して皇帝の信頼の下で外務大臣を25年間務めた外交の超ベテランである。使節団との会談には、鮫島尚信・欧州大使、青木周蔵・ベルリン大使、橘耕斎、市川文吉、西徳次郎などが通訳を務めている。

日露関係は、1768年エカチェリーナ二世の時代に漂流日本人を教師に日本語学校がサンクトペテルブルグに設置。1778年、ロシア勅使・イワン・アンチーピンが蝦夷地を訪れ通商を求めたが、松前藩が拒否。のちに仙台藩医工藤平助によりロシア研究書『赤蝦夷風説考』が書かれて、北方海防の意識が芽生える。1792年に漂流民大黒屋光太夫を伴い、アダム・ラクスマンが使節として再び通商を求めて根室に来たが、時の幕府老中首座松平定信は祖法（鎖国）を理由に通商を断り、異存があれば長崎奉行と交渉しなさいと信牌（入港証）を渡して帰す。この後、光太夫から聞いたロシア事情が桂川甫周により『北槎聞略』に纏められる。1804年、ニコライ・レザノフが、今度も漂流民・津太夫らを連れて長崎に来航し国書を手交、通商をもとめたが、これも幕府は断ったので択捉で幕府軍襲撃事件を起こし、そのため幕府は1806年異国船打払い令を發布した。これも仙台藩で『環海異聞』に纏められる。

そのあとも1811 - 1821年の捕囚ゴローニンと高田屋嘉兵衛の交換が行われるゴローニン事件をへて、1853年ペリー来航を迎えると、早速、ロシアもプチャーチンを長崎に送り、1855年には、米国に次いで日露和親条約、1858年には日露修好条約締結の展開となる。

ロシアは同年、清国にアムール川左岸を割譲させ、1860年のアロー戦争で英仏が清国に結ばせた北京条約に参加して、ロシアは更にウスリー川右岸を手に入れ、ハバロフスクとウラジオストクを建設する。一方、ゴルチャコフは、アメリカを親ロシアにしようと1867年にアラスカを720万ドルでアメリカに売却している。

使節団帰国後の1875年にゴルチャコフと駐露日本公使榎本武揚の間で千島樺太交換条約が締結される。こうして、ロシアと日本の領土をめぐる緊張関係は、日露戦争、第二次世界大戦を経て、現在まで続いている。

(2012・2・28 日露関係史、『米欧回覧実記』一久米邦武、ほか)

25 クリスティアン九世 (Christian IX 1818-1906) デンマーク王



ヨーロッパの義父・祖父

クリスティアン九世は、リュクスボー朝初代のデンマーク王で1863年から亡くなる1906年まで在位した。グリュクスブルグ家は前王家オレンボ一家の遠い支族で、男系の先祖をデンマーク＝ノルウエー王クリスチャン三世（在位1534 - 1559年）までさかのぼる。グリュクスブルグ公フリードリヒ・ヴィルヘルムの四男として生まれ、母はヘッセン＝カッセル伯の娘ルイーゼ・カロリーネ。1831年に幼くして父を亡くした後、フレゼリク六世の王妃で母方の伯母に当たるマリーの後見の下に育った。

1842年、母と同じヘッセン＝カッセル家出身で、又従妹に当たるルイーゼと結婚したが、名家の生れとはいえ財力がなかったため、デンマーク王室から無料で借りたコペンハーゲン市内の小さな家に一家で暮らした。子女の教育は家庭教師を雇う余裕がなかったため、夫妻が自ら行った。ルイーゼの母ルイーゼ・シャロデはデンマーク王クリスチャン八世の妹であった。そのため、1852年の王位継承法で嗣子のいないデンマーク王フレデリク七世の継承者に選ばれ、同年のロンドン議定書で、国際的にも承認されて、1863年、フレデリク七世の死去によって即位した。

即位後すぐに第二次シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争に巻き込まれ、1864年にプロイセンとオーストリアにシュレースヴィヒ・ホルシュタイン両公国に加えてザクセン＝ラウエンブルグ公国を割譲する小国の憂き目に遭っている。

妻ルイーゼ妃との間に3男3女をもうけた。その息子たちは各国の国王になり、娘たちはヨーロッパの諸王家に嫁いだため、「ヨーロッパの義父」と呼ばれた。

長男・クリスチャン・フレゼリクはデンマーク王フレゼリク八世（1843 - 1912）に、次男・アレクサンドラ・カロリーネはイギリス国王エドワード七世（1844 - 1925）に、三男・クリスチャン・ヴィルヘルム・フェルディナンドはギリシャ国王ゲオルギオス一世（1845 - 1913）に、長女・マリー・ソフィー・フレデリケ・ダウマーはロシア皇帝アレクサンドル三世皇后（1847 - 1928）に、次女・テューラ・アマーリア・カロリーネ・シャーロッテ・アンネは元ハノーファー王太子エルンスト・アウグスト二世妃（1853 - 1933）に、三女・ヴァルデマー（1858 - 1939）のみ無冠。

ロシア皇帝ニコライ二世、イギリス国王ジョージ五世、ノルウエー国王ホーコン七世、ギリシャ国王コンスタンティノス一世はいずれもクリスチャン九世の孫である。

欧州各国の閥閥による国家関係の縮図を、この皇帝に見ることができる。岩倉使節団と皇后ともに謁見したときは、55歳。88歳までの長寿を全うした。

（2015・3・1 デンマークの歴史 ほか）

26 シッキ (Julius Frederik Sick 1815-1884) デンマーク外交官



初代デンマーク駐日公使 電信通信の橋渡し

ベルリンを出た岩倉使節団はデンマークへ向かうが、すでに一行は11名に人数を減らしていた。コンソール港で使節団を出迎えたのは、デンマーク側接待員の元駐日公使のシッキ氏らであった。この後、クリスティアン九世との謁見、皇帝・皇后主催の夜会、博物館、講演、電信会社、軍艦製造所、砲台、ドックなど五日間のデンマーク滞在中、シッキ氏の世話になっている。とりわけ、ハイライトは証券取引所ホールでの大宴会である。実業家のティットゲンとシッキの二人が中心になり、帝相、大臣、有力者など延200人を集めたヨーロッパでは初の民間による大宴会で使節団を感動させている。これには訳があり、シッキは1870年に初代デンマーク駐日公使として来日し、デンマークが力を入れていたヨーロッパとアジアを電信で結ぶ事業の一環として、上海・長崎の海底ケーブル敷設への日本との契約を取り付けて、凱旋帰国していたからである。

彼の駐日公使としての仕事は、ほぼこの電信事業に絞られており、来日の前年にも、イギリスと利権を争い、ロシアとの契約に成功していた。

日本の電信事業は、意外に展開が早く、岩倉使節団がデンマークを訪問した時にはすでに国際電信の恩恵を受けていた。電信へ目が注がれたのは、1854年にペリーが浦賀に再来航して、将軍に土産として、鉄道の模型と共に電信機二基を献上したことに始まる。これに注目した薩摩藩主島津斉彬が、部下の寺島宗則に命じて、試作品を作り鹿児島城内の本丸と二の丸の間で、電信通話に成功した。明治新政府となると、寺島は早速電信事業を建議し、1869年には英国人技師の手を借りて、横浜・東京築地間の電信を開始している。シッキの斡旋で日本は1871年にはウラジオストック―長崎間と、上海―長崎間の海底電信ケーブルを完成しており、1871年にはすでに和文モールス符号も策定されていた。1874年には田中久重による国産電信機も製造されている。こうして日本とデンマークは電信によって早くから繋がっていたのである。

なお、シッキは17歳で外務省に入省。多くの業績を上げた後、退官し、歴史の研究者となった。だが、その後もウィーン会議を始め、数多の外交交渉にもその手腕を発揮したという。(2015・3・2 日本の電信事業の歴史、『岩倉使節団』一泉三郎)

27 ティットゲン (Carl Frederik Tietgen 1829-1901) デンマーク実業家



デンマークの渋沢栄一・あまた企業創設 日本電信の父

ティットゲンは現存するデンマークの数多くの企業の創設者である。1829年オデンスの地方中産階級社交クラブの支配人の息子に生れ、商業実習を終えて、英国マンチェスターに出て5年間働き、北ドイツ、ノルウェー、スエーデンを旅し見聞を広める。英国ではデンマークではまだ創生期にあった私立銀行の業務に精通する。デンマークの帰国、最初に小売業の C.F. Tietgen & Co. をコペンハーゲンで立ち上げるが失敗する。転機が訪れたのは、1857年に破産の管理人をする過程で、経済的、戦略的思考への眼を開かされると Privatbanken 銀行への経営に参画を求められ、それをデンマーク最初の投資銀行に育て上げる。小切手をデンマークで最初に導入したのも彼である。その後、いくつかの財政投資や創設に関与する一方で、個人投資も手掛ける。

その中に B & W やビール会社の Tuborg などもあるが、岩倉使節団との関連では海底電信ケーブルの敷設を中心に展開する国際的な電信会社である。デンマーク、ノルウェー、イギリスの電信会社と後にロシアの電信会社を合併させ、ロシアの極東への進出に乗って日本の電信事業への参画を早くから企画していた。ロシア函館総領事を使い、外務卿沢信嘉に働きかけ、次いで駐日公使シッキを送り込んで日本政府と交渉を始める。その必要性を痛感していた寺島宗則が交渉に当たり、30年の契約を結ぶ。これが、大北支那日本拡張電信会社 (The Great Northern China and Japan extension Telegraph Co.) との契約である。実際に日本は契約延長もあって同社との国際契約が切れたのは1969年である。日本は長崎までの海底部分は契約に頼り、国内陸上部分は出来るだけ、外国資本に縛られるのを避けたようだ。1872年には関門海底電信ケーブルが完成。1873年には長崎—東京陸上電信開通し1879年には国内すべて開通している。岩倉使節団歓迎の大晩餐会を企画したティットゲンは、歓迎スピーチをし、そのお返しに、岩倉具視はデンマークの電信事業への協力・貢献を評価したスピーチをして大喝采を浴びている。

(2015・3・3 『岩倉使節団』一泉三郎、日本電信事業の歴史、ほか)

28 オスカル二世 (Oskar II 1829-1907) スウェーデン王・ノルウェー王



スウェーデン・ノルウェー両国の国王 詩人 歴史家 エッセイスト

スカンジナビア三国 (デンマーク、スウェーデン、ノルウェー) は、元々同じ民族で中世まで一国に連合していたこともあるが、岩倉使節団訪問時は、スウェーデンとノルウェーも既に実質、二国に分かれていたが、国王はオスカル二世が同君連合していた。

父はオスカル一世、母ジョゼフィーヌはナポレオン一世の皇后ジョゼフィーヌの孫。嗣子のなかった兄カール15世の死により、前年の1872年9月に、即位したばかりであった。この時代スウェーデンの社会文化が新興し、成熟期を迎え、産業革命もおこっていた。因みに、後にノーベル賞を遺言したノーベルがダイナマイトや無煙火薬を発明したのが1866年である。アメリカへの大規模な移民が続き、ロシア帝国への対抗馬としてのドイツ帝国の台頭を歓迎したが、基本的には中立政策をとり、19世紀ヨーロッパに起きた帝国主義とは一線を画した。然し、次第に汎ゲルマン主義に傾倒し、ドイツ・スカンジナビア国家連合を構想したことで、スウェーデン政府やデンマークの非難を浴び、同君同盟下にあったノルウェーも世界第3位の海運国に成長し自立が進み、1905年に離脱した。国王の統治権に陰りが見え始めた1907年に、78歳で没した。

教育の振興に尽力し、自ら詩を作り、エッセイ、戯曲、音楽史を始め、『スウェーデン艦隊の思い出』『チャールズ7世の思い出』等の歴史書などを残し文化人でもあった。

スウェーデンのナショナリズム昂揚する時代でもあり、スヴェン・ヘディンを始めとした探検隊が中央アジアに向かい、またノルデンショルドは史上初めて北極海を越え、1879年に北東航路を発見した。ナンセンのフラム号の遠征など、これらスウェーデン探検家を積極的に支援した。

ノーベル賞の創設は1901年である。スウェーデン・アカデミーでの国王儀礼として定着し、スウェーデン王国としての栄誉と国威を高めた。ノーベル平和賞がノルウェー議会のノーベル賞委員会が主管するのは同君連合の名残だろう。

岩倉使節団一行はデンマークからバルト海を渡り、マルメ港で政府の接待員に迎えられ、特別列車で19時間かけてストックホルムに向かう。オスカル二世と謁見したのは1873年4月25日で、その日に晩餐会と舞踏会で歓迎されている。翌日は、クイーンズアイランドの離宮へ、海軍所へは国王の案内で訪れ、ドック、艦隊停泊所、砲兵将校の兵舎、士官宿泊所、貯蔵庫、兵器庫など視察している。その他、木材製作所、ポリンデル製鋼所、マッチ工場など見学している。スウェーデンのマッチはすでに日本への主要輸出品であった。(2015・3・4 スウェーデンの歴史、『米欧回覧実記』、など)

29 ヴィットーリオ・エマヌエレ二世 (Vittorio Emanuele II 1820-1878)

イタリア王



イタリアを統一に導いた王

岩倉使節団一行はアルプス越えでミュンヘンから列車でイタリア・フィレンツェに入り、1873年5月13日に、二年前にフィレンツェから首都を移したローマのキナーレ王宮で、エマヌエレ二世に謁見した。夜には国王主催の晩餐会が開催され、マルゲリータ皇太子妃もホステス役を務めた。

イタリアの統一は僅かに12年前のこと。オーストリア帝国の支配下にあったロンバルディアとヴェネチアに独立運動が起こり、サルディニアのエマヌエル二世の下で、帝相カミッロ・カヴール侯爵が立ち上がり、強力で近代化を進め、富国強兵を図った。そして、カヴールの巧みな外交戦略もあってフランスの協力を得、また国内では「青年イタリア党」を率いたマッシーニや義勇軍を立ち上げた民権家ガリバルディと手を結び、幾多の苦難を乗り越えてイタリアの統一を果たした。そしてドイツがオーストリアに勝った1863年にオーストリアからヴェネチアを取り戻し、またドイツがフランスに勝った1870年にはナポレオン三世の影響下にあったローマの教皇領を取り返す。

このイタリアの復興運動「リソルジメント」の情報は、初代駐日イタリア公使のラ・ツウールによって日本にもたらされ、イタリア・モデルとして日本側にも人気があったので、明治維新との類似性とほぼ同じ時期に独立したという近親感があったと思われる。

使節団はイタリアではフィレンツェではサンタ・マリア大聖堂、カテドラル、ウフィツィ美術館など観光をして、ローマではサンピエトロ大聖堂、フォロ・ロマーナ、コロシウム、バチカン美術館を見学、ナポリでカセルタ宮殿、ポンペイ遺跡、ヴィスヴィオ火山を、ヴェネチア、ロンバルディアでもほとんど現在の観光旅行に近いルートを見物して楽しんでいる風情がある。欧米を回覧して、すでに十分に西洋文明の粋は見尽したので、イタリアでは西洋文明の源泉でもある古代ローマ遺跡や美術館、美術品の鑑賞に余裕をもって費やしたのであろうか。この位の余禄があっても許されるだろう。

(2015・3・5 『岩倉使節団』 一泉三郎、『米欧回覧実記』 一久米邦武)

30 ドスチアーニ (Alessandro Fe' D'ostiani 1825-1905) 駐日イタリア公使



日本から蚕種を輸入目的で派遣された駐日イタリア大使

北イタリアの養蚕どころでもあるブレッシア出身の伯爵。ウィーン大学卒。ブラジル（3回）、ペルシャ、スイス、ギリシャのイタリア公使館に勤めて、1870年3月、駐中国・日本全権公使として赴任した。1873年岩倉使節団を本国で迎えるためにイタリアに帰国していた。使節団をフィレンツェで出迎えて、滞在中、始終行動を共にして応接に務めた。イタリア回覧の最後に、ドスチアーニは、一行をミラノに誘い、その途次、自分の故郷の都市ブレッシアに立ち寄せ、町の市庁舎や美術館を訪ね、豪壮なドスチアーニ伯爵邸に招いて午餐を馳走している。そこには、市の高官や現地の有力な蚕糸業者も集まっていた。それには訳があり、イタリア、フランスでは1850年代に微粒子病という蚕病で、養蚕業界は致命的なダメージを受けていた。それを救うために、ブレッシアを中心に蚕卵商人が、優秀な日本産蚕卵に目をつけて、1866年に日伊修好条約が結ばれたのは、日本の蚕卵獲得が当面の目的であり、ドスチアーニ公使も、そのために選ばれた人選であった。彼の兄弟二人も蚕卵商人で、ドスチアーニは日本に着任すると、早速外務卿・副島種臣と交渉して、イタリア側の治外法権を放棄する見返りに、政府派遣のイタリア人蚕卵商人が、日本の蚕の産地に出入りして、質の良い蚕を検査するためのイタリア人の内地旅行の自由を、暗黙の了解として獲得していた。それが1873年2月22日のことである。その直後の同年2月25日に、在ローマ弁務公使・佐野常民と同行して、岩倉使節団の応接のために帰国の途についた。

このイタリアが領事裁判権を放棄したニュースは、やがて米公使・デ・ロング、英公使・ワトソン、独公使プラントの知るところなり、猛烈な抗議を受けて結局は撤回されるが、その前にイタリアは十分の実利を得ており、1873年の時点で日本の輸出の23%は絹糸、蚕紙の輸出であり、イタリア向けが蚕紙の3/4を占めていた。ドスチアーニの作戦勝ちであった。日本もイタリアを皮切りに領事裁判権破棄を狙ったが、不平等条約に対する欧米の結束は固く、実現は更に遠のくことになる。

なお、ドスチアーニはウィーン万博の日本政府の顧問にも任命されており、その役割を終えた1874年10月に再び日本に赴任し、1877年半ばに離日した。画家キヨソネやフォンタネージ、彫刻家ラゲーサ、建築家カッペレッティなどイタリアの芸術家たちを日本政府へ招聘することにも尽力した。日本美術のコレクターとしても活躍した。（2015・3・6 『岩倉使節団』一泉三郎、『回覧実記一現代誤訳』一水沢周、『駐日イタリア公使アレサンドロ・フェ・ドスチアーニ伯爵と外国人内地旅行問題について』一ベルテリ・ジュルオ・アントニオ）

3 1 フランツ・ヨゼフ一世 (Franz Joseph I 1830-1916)

オーストリア皇帝・ハンガリー国王



オーストリア (ハプスブルグ帝国) 実質最後の皇帝「国父」

オーストリア皇帝・ハンガリー国王 (在位 1848-1916) 68年の長い在位と、国民からの絶大な敬愛から晩年はオーストリア帝国の「国父」と称され、「不死鳥」とも呼ばれた。オーストリア帝国 (ハプスブルグ帝国) の実質的な「最後の皇帝」とも言われ、第一次世界大戦中、肺炎で、ウィーンにて86歳で崩御、二年後、1918年のハプスブルグ帝国崩壊は見ずに死んだ。岩倉使節団とは1873年6月、妻エリザベートと共に謁見した。ハプスブルグ家は、1273年、スイスの田舎貴族のルドルフ一世が、七選帝侯により神聖ローマ皇帝に選任されたときに始まり、1493年、マクシミリアン一世が、ベルギー、オランダを領有、カール一世の時代に、ハンガリー、スペイン、イタリアを支配し、その領土は、ほぼ欧州全域に及び、『戦いは他に任せよ。汝幸あるハプスブルグは婚姻せよ』の家訓の実践で、閥閥支配を640年続けた。プロテスタントの台頭とプロイセン、ロシアの勢力拡大、1789年のフランス革命の影響で、次第に帝国内に動乱の芽が生まれていた時代に1848年ヨゼフ一世は即位し、1857年市内を取り巻く城壁を壊し、自由の気を取り入れるが、イタリア独立統一を求めるサルディニア軍との戦いに敗れ、新興のプロイセン軍との戦いでも大敗し、北イタリア、ヴェネツィア等の領土を次々に失い、対外的に明らかなる没落の一途を辿る。個人的には実弟のメキシコ皇帝マクシミリアンが遠い異国の地で処刑され、長男の皇太子のルドルフの自殺、皇后エリザベートもジュネーブで無政府主義者に暗殺され、次の後継者に指名した甥の皇太子、フランツ・フェルディナント大公夫妻が1914年サラエボで暗殺されるなどの悲劇に見舞われた。皇帝は誠実だが保守的、努力家だが洞察力に欠ける旧時代の最後の君主という評価が一般的だが、『わが青春のハプスブルグ』の著者・塚本哲也は、「会議は踊る」世紀末のウィーンに花開いた文化と人材は、多民族国家ハプスブルグ帝国に張り巡らされた巨大で複雑な官僚機構や経済組織の中で、多民族に共通する理念や原則、永い歴史と伝統を貫く本質的なものを求めていく土壌が培ったものと見ている。オーストリア帝国は形こそ王政だが、実質は共和制であった。フランツ・ヨゼフ皇帝の、誠実で、押し付けない人柄が、文明、科学技術が発展する中で人間性が抑圧されることを嫌い、歴史と伝統の奥の方に鎮座して安定した平和の時代の象徴そのものになっていたからこそ、世紀末のウィーンの俊秀たちは文化のパイオニアとして、思う存

分自らの道を突き進んで行け、百花斉放の時代を生んだとみている。更に、19世紀半ばごろより、全国的に網の目のように張り巡らされた、ギムナジウムの教育システムにも注目する。教育目的は宗教心や国家への忠誠心の育成ではなく、大学教育にふさわしい学習研究能力の育成であった。ギリシャの古典の購読で、抽象的思考方法を学び、それにより、人文科学、社会科学、技術、医学などあらゆる分野の才能の開花を育んだ。ヨハン・シュトラウスの『革命行進曲』『皇帝円舞曲』『蝙蝠』。画家・クリムトの奔放。純粋法学者で、法学は政治的イデオロギーから峻別すべきと説いたハンス・ケンゼル。経済学者のシュンペンターは、「経済的失敗のためには崩壊しないが、非常な経済的成功こそが、それを擁護してきた社会制度を覆して資本主義を崩壊させる」と現在の問題を予告した。同じ経済学者のハイエクは、全体主義の台頭を『隷属への道』で早くから予告・警鐘を鳴らして、後のヒトラー、スターリンの出現を予告。深層心理学のフロイトの革新。作曲家マーラー。哲学ヴィトゲンシュタイン。建築家オットー・ワグナー。EUの父・クーデンホーフ＝カレルギーらの英俊を生んだ世紀末のウィーンの豊穡な文化は、ハプスブルグ帝国の遺産と言えよう。(2015・1・6 『わが青春のハプスブルグ』(塚本哲也) 文春文庫、『米欧回覧実記』-久米邦武、ほか)



32 エリザベート (Elisabeth Amalie Eugenie Von Wittelsbach=Sissi. 1837-1898)



奔放に生きた絶世の美女シシーことエリザベート

フランツ・ヨゼフ一世・オーストリア・ハンガリー帝国皇帝の皇后。

岩倉使節団とは1873年6月に皇帝と共に謁見。ウィーン万博の日本庭園にて、日本家屋を建設中の棟梁の鉋を削る作業に見とれ、鉋屑の美しさと香気を誉めて持ち帰ったことで、日本のウィーン万博での名声を高めたとされる。シシーの愛称で、いまでもウィーンで絶大な人気がある。

バイエルン王家・マクシミリアン公とバイエルン王女ルドヴィカの次女として生まれ、姉ヘレーネの見合い相手の従兄である皇帝フランツ・ヨゼフ一世に見初められて結婚。自由放任主義の父親の血筋を継ぎ、映画『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台に近い南チロルの野山で、山登り、乗馬、詩作、絵画、語などで夢見るよう育った野性的な性格は、皇后となっても変わらず、籠の鳥の堅ぐるしい宮廷生活を拒否し、アフリカ、イタリア、ギリシャなど諸国に放浪の旅を続けるとか、戦争の前線で負傷兵の見舞いや激励することを好んだ。ウィーンに住むよりハンガリーの風土、人民（マジャル人）を愛し、侍従、女官はマジャル人に代えたり、ウィーンで嫌いな公式行事にもハンガリーでは積極的に参加した。ハンガリー人も、そんなシシーを愛して、独立を求めながらも、オーストリア・ハンガリー二重帝国にとどまったのはエリザベートの魅力と情熱にあったと言われる。皇太后である義母・ゾフィーとの不仲と息子ルドルフ皇太子（岩倉使節団はこの皇太子に謁見しているー1873年6月12日）自殺もあって、次第に精神を病んで、奇行や浪費に走ることが多くなり、最後は旅行中のジュネーヴ・レマン湖のほとりで、イタリアの無政府主義者に短剣で刺殺されたが、フランツ・ヨゼフ皇帝は、生涯この妻を熱愛し、自由な行動を許し、毎日のように手紙を書き送った好人物であった。作曲家でピアニストのリストは、「皇后は天の幻のように美しかった」と感動したが、172cmの長身で、ウエスト50cm、体重50キロの颯爽たる美人が乗馬で野原を駆けまわる麗姿で庶民に愛された伝説は今も、シシーの愛好家の絶えぬゆえんだろうか。虚飾を排し軽薄な栄光を嫌い、真の自由を愛した皇妃は、ドイツやイタリアで統一のナショナリズムの燃え上がる19世紀のヨーロッパで、「私に祖国はない」と言い放つコスモポリタンであり、ユダヤ排斥の声の高まる中で、ユダヤ系の詩人ハイネに傾倒し、狭量な民族主義者を公然と無視した勇氣ある皇妃であった。（2015・1・6『わが青春のエリザベート』一塚本哲也、『米欧回覧実記』一久米邦武、ほか）

3 3 アンドラーシ・ジュラ (Andrassy Gyula 1823-1890)

オーストリア・ハンガリー帝国外務大臣



波乱万丈のハンガリーの帝相・外相

アンドラーシ・ジュラ伯爵は、19世紀ハンガリーの貴族・政治家で、オーストリア・ハンガリー二重帝国のハンガリー帝国の初代首相・帝国外相を務めた。

岩倉使節団とは、1873年6月5日、ウィーン万博を見る前日に、外相としてのアンドラーシと会っている。6月13日にも岩倉大使と条約問題を協議した模様である。

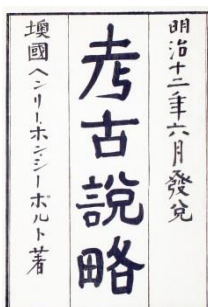
アンドラーシは1848年ハンガリー革命と独立戦争に参加するが、革命は敗北し、パリ・ロンドンへ亡命する。1857年恩赦で帰国、ハプスブルグ王家と和解し、ハンガリーの自治権獲得をめざし、オーストリア帝国との妥協（アウスグライヒ）を推進した。その陰には、ハンガリー好きのエリザベートとの信頼関係があったと言われる。

1866年の普墺戦争でビスマルクのプロイセンに敗れて、ドイツ連邦から離れ、1867年オーストリア・ハンガリー二重帝国が成立すると、ハンガリー帝国の首相に就任、1870 - 71年の普仏戦争では、中立を堅持する。1871年ドイツ帝国成立。1871年二重帝国外相として、ロシアとドイツとの提携に腐心し、1872年には、独露との三帝同盟の締結に成功する。1877年の露土戦争には中立を守った。

1878年のビスマルク主唱により開かれたベルリン会議で、露土戦争後のバルカンを巡って激化した諸国による利害対立の調停が討議され、セルビア、モンテネグロ、ルーマニアの独立、ブルガリアの自治が認められ、ボスニア・ヘルツェゴビナがトルコからオーストリアの行政下に置かれて、ロシアのバルカン進出は阻止されことになったが、反対に独露墺三帝同盟は弱まったので、翌1879年にドイツとの二帝同盟締結を花道にして政界を引退した。一時的には、アンドラーシ外交はオーストリア・ハンガリー帝国にとって大成功にみえたが、後に、ボスニア・ヘルツェゴビナ併合が、ロシアやスラヴ諸国との非和解的対立を招き、その後の第一次世界大戦を経て、ハプスブルグ帝国解体の原因となるのは政治の難しさと歴史の皮肉さを感じる。

(2015・1・6 『米欧回覧実記』一久米邦武、『岩倉使節団』一泉三郎、ほか)

34 ハイน์リッヒ・フォン・シーボルト (Heinrich Philipp von Siebold
1852-1908) 外交官・通訳官



肖像写真なし。 ウィーン万博での岩倉使節団通訳・小シーボルト

父はフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト。父と区別するために小シーボルトと呼ばれる。兄は外交官で、井上馨外務卿の秘書となったアレクサンダー・フォン・シーボルト。異母姉に日本人女性として初の産婦人科医となる楠本イネがいる。ドイツ出身であるが、後に外交官の実績が認められて、オーストリア・ハンガリー帝国の外交官兼通訳官として働き、業務の傍ら、考古学調査を行い、日本で初めて『考古学』の言葉を使い始める。日本で岩本はなと結婚し、一男一女をもうける。著書に『小シーボルト蝦夷見聞記』（平凡社東洋文庫）『考古説略』がある。プロイセンで生まれ、2度来日、父の再来日に備え、父の研究資料の整備を手伝ううちに日本への憧れを抱き、父の死で、一緒に来日は出来なかったが、兄アレクサンダーが、徳川昭武使節団に同行帰国の際、同道して、1869年初来日を果たす。オーストリア・ハンガリー帝国公使館で通訳、書記官を務めた後、代理公使となり、同国の国籍を得る。ウィーン万博では、日本政府の依頼により、出品の選定に関わり、同万博に通訳として随行。シーボルト兄弟関わった日本館は、連日の大盛況で、成功を収める。その際に選定に関わった、町田久成。蜷川式とはその後も親交を続けた。子供の内、長男はウィーン万博中に夭折、次男の於菟（オットー）も日本画家として、岡倉天心の芸術学院に入学するが25歳で亡くなる。学習院の乃木希典は驥係として未亡人の岩本はなを採用、免許皆伝の腕前を使って、長唄、琴、三味線、踊りの教授に当たらせた。ハイน์リッヒはエドワード・モースとの大森貝塚発掘、アイヌ民族研究にも成果を挙げた。晩年、病気で帰国、再婚したカーペンター夫人の居城、南チロルのフロイデンシュタイン古城で過ごし、日本美術の蒐集に努める一方で、ベルツ博士の治療を受けていたが、その甲斐なく、その地で生涯を終えた。子孫の関口忠志らにより、日本シーボルト協会設立を準備中。医師・堀内和一郎も直系子孫7代目。（2015・1・6 『米欧回覧実記』一久米邦武、他）

35 セレソール (Paul Ceresole) スイス大統領 (1832-1905)



日本の赤十字加入の橋渡し役

1867 - 1870年最高裁判事を経て、1870年 Vaud 州代表となり、スイス連邦議会参事メンバーに入る。スイスは7人の連邦参事により構成され、各参事が省（大臣とは言わない）を担当する。そして、7人の内の一人が、大統領となり、もう一人が副大統領となるが、一年間の持ち回りで、担当省を抱えたまま、大統領となる。大統領は国家元首ではないので、参事会を主宰するが、権限は7人平等である。

セレソールは1872年副大統領で、73年大統領として、岩倉使節団と会見した。（翌年は持ち回りで違う参事が大統領なる）1870 - 71年財務省、72年防衛・陸軍省、74 - 75年法務・警察省を務めた。

首都ベルンで岩倉使節団と接見し、条約問題を協議し、一行のルツェルン遊覧などでも歓待したが、セレソールは予定になかったジュネーブ立ち寄りを要請した。この背景には、ジュネーブに本拠のあった赤十字国際委員会（当時は『負傷軍人救護国際常設委員会』と言った）の総裁キュスクフ・モワニエが、欧州以外の国にも赤十字に入って貰おうと、日本に目をつけて、セレソール大統領に依頼していたもので、ジュネーブでモワニエ総裁と会った岩倉と伊藤は熱心に話を聞いたが、時期尚早とその場では拒否した。

帰国後、ウィーン万博副総裁の佐野常民と大給恒が華族の活躍の場になると岩倉具視に働きかけ、1877年西南戦争の傷痍軍人救護を契機にして日本赤十字社が創設される。

1880年外国人も社員になれることになり、大隈重信、山県有朋、西郷従道、大山巖、渋沢栄一、井上馨、伊藤博文、ハインリッヒ・シーボルト、アレキサンダー・シーボルトが社員となる。1886年万国赤十字社に正式加入する。勿論アジア最初である。つまり、セレソールが結果的に橋渡し役となったのである。

(2015. 1. 15 スイス連邦の歴史、『人道ジャーナル第3号』日本赤十字社、ほか)

36 アンベール (Aime Humbert) 元駐日スイス公使 (1819 - 1900)



幕末の日本を紹介の『幕末日本図絵』を出版

スイス生まれ。ローザンヌ・アカデミーで史学、ギリシャ語、ギリシャ文学、宗教学を学び、ドイツで教鞭をとる傍ら、ドイツの大学で言語学、哲学、文学を修め中退し高等学校のラテン語教師をしていたが、ヨハン・ヤコブ・ホッティンガーの著書『ウイリヒ・ツヴィングリとその時代』仏訳を出版。フランス7月革命の影響で、自由主義の潮流がヨーロッパで大きく動き出し、スイスにも波及、カトリックとプロテスタントの対立から革命が起きる。1848年に臨時政府の委員に任命された機会に官界に転じ、州文部長官、州参議院議員を歴任、地元の時計業組合会長に就任した。その時計をアジアに売り込もうと1862年(文久2)駐日全権公使・遣日使節団団長として来日し、米、露、蘭、英、仏、葡萄牙、プロシアに次ぐ、第8番目の日本との修好通商条約を締結する。

条約交渉の間に、日本文化・風俗のエキドチックさに魅せられ、浮世絵版木や書物を蒐集の傍ら、英絵師のワーグマン (Charles Wirgman 1834-1891) と写真家ベアト (Felice Beato 1834-1908) の協力を得て、江戸、横浜の風俗写真・絵など3000点を蒐集して帰国、日本見聞記の *Le Japon Illustré* 『幕末日本図絵』を1870年にパリで刊行する。これにより欧州におけるジャポニズムの広がり貢献する。2014年スイス・日本修好条約締結150周年を記念して、両国で「アンベール・プロジェクト2014」が発足し、各地で一年間にわたり「幕末日本文化の回顧展」が開催された。

岩倉使節団のスイス訪問時は公式接待要員として、一行を手厚く歓待した。

(2015・1・15 神奈川大学『幕末日本図絵』 *Le Japon Illustré*, ほか)